

平成 30 年度 全国高等学校総合体育大会(静岡)審判員報告

C1:男子体操競技

男子審判長 近藤昌夫

平成 30 年度全国高等学校体操競技選手権大会は、8 月 4 日～6 日に静岡県草薙総合体育館（このはなアリーナ）において開催されました。競技は 2017 年版採点規則および平成 29 年度版高等学校男子適用規則と男子体操競技情報 26 号までを採用しました。

FIG 規則の 2017 年版が施行され 2 年目になりました。施行後、FIG からの追加情報を男子体操競技情報 26 号改訂版として通達いたしましたところ、現場の選手や監督の皆様には大きな問題もなく浸透されているように感じました。審判会議の打ち合わせにおいて、高等学校適用規則の採点の根幹は「美しい体操の構築」と「基本技の習熟」を評価すること、不完全な実施や自己の能力を超えた演技に対しては規則通りの対応を行い、高校生が安全に将来の方向性へと導けるように E スコアの採点を行うことを確認いたしました。

団体決勝は史上初、清風高校と市立船橋高校の両校同点優勝となりました。開始種目から最終種目にいたるまで両校の白熱した試合展開は見応えがありました。両校とも難度の高い技を取り入れながら、実施減点をできるだけ抑えて E スコアを高める戦いでありました。特に終末技において着地を止めにくいとする気迫が会場全体に伝わってきました。最終種目では先に演技を終えた清風高校が市立船橋高校のゆか演技を待つことになりました。ゆかの演技は 1 人目 2 人目と高得点を重ね、ついに 3 人目で同点となりました。最終演技者の得点と団体の順位が表示されると会場は騒然となりましたが、この時同点優勝であることは会場や清風高校には伝わっていなかったもので、後に結果を知り喜びも倍増したことでしょう。何はともあれ歴史的瞬間に立ち会えたことは審判冥利につきました。

◇同点優勝 2 校の得点の変化

	1 種目	2 種目	3 種目	4 種目	5 種目	6 種目	最終種目
清風 合計	ゆか	あん馬	つり輪	跳馬	平行棒	鉄棒	休み
	42.40	42.10	40.55	43.00	43.60	43.05	
	42.40	84.50	125.05	168.05	211.65		254.70
市立船橋 合計	あん馬	つり輪	跳馬	平行棒	鉄棒	休み	ゆか
	42.45	40.75	43.40	42.95	41.35		43.80
	42.45	83.20	126.60	169.15	210.90		254.70

個人総合では、三輪哲平選手(清風)が 86.25 を獲得して優勝しました。第 2 位には橋本大輝選手(市立船橋)が 84.80、第 3 位には橘汐芽選手(松蔭)が 84.35 のスコアでメダルに輝きました。上位 3 名とも団体選手権を戦いながらの個人戦の勝負となり、自分のためではなくチームのために貢献する姿が見えました。多くの重圧がかかる状況下で、失敗を最小限におさめた選手が上位に名を連ねることができました。今大会の特徴として個人総合上位 3 名をはじめ、種目別で優勝者は全て違う学校の選手でした。最近の傾向として種目に特化すれば、どの学校にも優勝のチャンスが広がってきている証拠であると考えられます。優勝者は以下のとおりです。

- | | | | | | |
|------|-------------|-------|------|------------|-------|
| ・ゆか | 上山廉太郎（市立船橋） | 14.70 | ・あん馬 | 長崎柊人（暁） | 14.00 |
| ・つり輪 | 山本泰己（名城大附属） | 14.60 | ・跳馬 | 浦木峻輔（秀英） | 14.00 |
| ・平行棒 | 三輪鉄平（清風） | 14.90 | ・鉄棒 | 前田楓丞（自由ヶ丘） | 15.15 |

団体予選通過 16 位の得点は 221.35、17 位が 220.00 でありその差は 1.35 でした。また 15 位から 17 位までの差が 2 点弱であり、ほんの僅かな演技実施の差が決勝進出を決めたこととなります。

監督会議にてお伝えしたとおり、つり輪の一人 30 秒アップを E 審判にお願いして計測しました。審判長席から確認したところ、競技開始のコール前にアップが終了していたチームは 34 組、競技開始コール中に最終演技者がアップしていたのは 8 組、競技開始コール後に最終演技者がつり輪につかまったのが 6 組ありました。ほとんどの組が時間を守っていたこととなりますが、一部大幅に演技開始が遅れる組もありました。ぜひ都道府県レベルでアップの遵守を勧めるようお願いいたします。

競技中に起った問題として、決勝の 2 班目、ゆかの絨毯のつなぎ目に足を入れてしまい演技に影響したとして「再演技」の要請がありました。このつなぎ目に関しては直前の 30 秒アップ後にゆかの審判員が気づき、10 人以上で調整したにもかかわらず起きてしまった経緯もあり、「再演技」を特例措置として認めました。器具の不具合についてはできるだけ演技前に解決し、選手に事故・怪我がないことを徹底することが必要になってきます。

最後に、大会運営者、高体連関係役員、静岡県体操協会や補助役員、その他大会に携われました多くの皆様のお陰により素晴らしい大会となりましたこと、心より感謝申し上げます。

《ゆか》

D1： 大門 景

<決勝における D スコア分布>

6.2	6.0	5.8	5.7	5.6	5.5	5.4	5.3	5.2	5.1
1名	1名	3名	6名	6名	9名	5名	10名	9名	3名
5.0	4.9	4.8	4.7	4.6	4.5	4.2			
7名	5名	9名	2名	1名	5名	1名			

<決勝における E スコア分布>

9.00以上	8.95	8.90	8.85	8.80	8.75	8.70	8.65	8.60	8.55
0名	1名	0名	1名	0名	1名	1名	2名	2名	0名
8.50	8.45	8.40	8.35	8.30	8.25	8.20	8.15	8.10	8.05
1名	4名	9名	5名	5名	3名	6名	7名	6名	5名
8.00	7.95	7.90	7.85	7.80	7.75	7.70	7.65	7.60	7.55
3名	3名	1名	4名	2名	0名	2名	0名	1名	0名
7.50	7.45	7.40	7.35	7.30	7.25	7.20	7.15	7.10	7.05以下
1名	0名	0名	1名	1名	0名	0名	0名	1名	4名

<着地加点>

	予選	決勝
D 難度	11件	12件
C 難度	6件	1件
B 難度	4件	0件
A 難度	1件	0件

<決勝における 2 回宙返り系の技 実施内容>

技名	決勝
後方かかえ込み 2 回宙返り	22件
前方かかえ込み 2 回宙返り	14件
後方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり	12件
後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり	9件
前方屈身 2 回宙返り	8件
後ろとびひねり 前方かかえ込み 2 回宙返り	2件
伸身 2 回宙返り 1 回ひねり	1件
前方かかえ込み 2 回宙返りひねり	1件
前方屈身 2 回宙返りひねり	1件

<決勝における ND (83 演技中) >

2 回宙返りのない演技 16 演技
 ライン 13 演技
 タイム 0 演技

<1 演技中に 2 回宙返り系の技を 2 つ以上取り入れた演技>

決勝において 2 回宙返り系の技を 2 つ以上取り入れた実施は、4 演技であった。内容は以下の通りである。

- ・後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり (E)、後方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり (D)
- ・前方かかえ込み 2 回宙返りひねり (D)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり (E)
- ・前方屈身 2 回宙返り (E)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり (E)
- ・前方屈身 2 回宙返り (E)、後ろとびひねり前方かかえ込み 2 回宙返り (D)

<減点箇所とその傾向>

予選から決勝まで全体を通して、着地に苦戦する選手が多く見られた。特に、2 回宙返り系の技を ND 回避のために構成に組み込む実施が多く見られたが、その着地をまとめきる選手は僅かであった。高体連適応ルールでは 2 回宙返りのない演技には 0.1 の ND があるが、実際には着地の減点が -0.1 以上になってしまっている選手が多く見られた。また、多くの選手が終末技では、後方伸身宙返り 3 回ひねりや後方伸身宙返り 5/2 ひねりを実施していたが、完全にひねりきり着地への準備局面が見られた捌きは僅かであり、着地が止まっても減点を伴う実施が多く散見された。

また、演技中の単純な捌きや柔軟性を表現する技などにおいて、指先やつま先まで意識の行き届いていない演技が多く見られた。

<今後に向けて>

ゆかの演技ではタンブリングでの着地の出来栄えが得点に大きく影響する。そのため、着地に焦点をあて、練習をすることは重要である。今回 2 回宙返り系の技、とりわけ、後方 2 回宙返りで着地が上手く取れず大きく前や後ろに弾んでしまう選手が多く見られた。今後その先の技に挑戦した際にも安定した着地を取れるように、2 回宙返り系の基本となる後方 2 回宙返りや前方 2 回宙返りの着地は余裕を持って止められるように練習を重ねてほしい。終末技では、多くの選手が着地を止めようと意識をしていることが感じられたものの、実際に止まった数は少なかった。ゆかの演技は着地が多い種目のため、毎回の着地で 1 歩動いたとしても、それが小さな -0.1 の 1 歩か、-0.3 の 1 歩かによって E スコアは大きく変わってしまう。しっかりと着地の準備を行い、止まることはもちろん着地姿勢まで意識して練習に励んでいただきたい。

もう一点、今後一番意識し改善していただきたいのは、単純なステップや柔軟性を表現する技などの体操の基本となる部分である。演技開始の手をあげる時から最後に挨拶をするところまで、指先からつま先まで意識できるように練習をしていただきたい。

《あん馬》

D1： 梅田秀一

＜決勝における D スコア分布＞

6.1	5.7	5.6	5.5	5.4	5.3	5.1	5.0	4.8	4.7
1名	3名	2名	4名	2名	3名	2名	1名	6名	9名
4.6	4.5	4.4	4.3	4.2	4.1	4.0	3.9	3.7	3.6
4名	7名	3名	3名	6名	4名	4名	3名	2名	1名
3.5	3.4	3.3	3.2	3.0	2.8				
4名	2名	3名	1名	3名	1名				

＜決勝における E スコア分布＞

8.95	8.85	8.80	8.75	8.65	8.60	8.55	8.50	8.45	8.40
1名	1名	2名	2名	2名	1名	2名	2名	4名	3名
8.35	8.25	8.20	8.15	8.10	8.05	8.00	7.95	7.90	7.85
3名	6名	3名	1名	1名	1名	3名	2名	1名	1名
7.80	7.75	7.70	7.65	7.60	7.55	7.50	7.35	7.30	7.25
5名	2名	4名	3名	1名	4名	3名	1名	1名	2名
7.20	7.15	7.00	6.80	6.50	6.45	6.35	6.00	5.75	5.50
1名	2名	1名	1名	2名	2名	1名	1名	1名	1名
5.40	5.15	4.60							
1名	1名	1名							

＜減点箇所とその傾向＞

- ・ 正（逆）交差倒立：腰のまがり、力の使用等で合計 0.2～0.6 程度の減点。
- ・ マジャー移動（シバド移動）：角度の逸脱、腰のまがり等で合わせて 0.2～0.6 程度の減点。
- ・ 縦向き移動前後の馬端中向き旋回や、馬端外向き旋回での角度逸脱で 0.1～0.3 程度の減点。
- ・ フロップやコンバインでの腰のまがりで 0.2～0.4 程度の減点。

＜今後に向けて＞

- ・ 交差倒立技は、振動技であることを前提に捌いて欲しい。足先をスイングさせずに力を用いて腰がまがる捌きでは難度価値点以上の減点を受けてしまう。
- ・ 単純な A 難度の縦向き旋回でも正しい角度からの逸脱により、中欠点を受けてしまう実施が多く見られたので、単純な技においても大幅な減点をされないように注意をして欲しい。
- ・ 基本的にグループ II・III の技は次の技に繋げなければ難度は認定されない。「馬端中向き縦向き旋回（1 周）～あん部へ片脚入れ」（下図）の様な捌きは、縦向き旋回の A 難度は不認定となる。シバド移動から同様の捌きが実施され、不認定としたケースも発生したので、難度を獲得するためにはもう 1 周旋回に繋げた後に片脚技に入る等の捌きが求められる。



縦向き旋回不認定

《つり輪》

D1：森 直樹

＜決勝における D スコア分布＞

6.1	6.0	5.9	5.8	5.7	5.6	5.5	5.4	5.3	5.2
1名	2名	1名	1名	0名	1名	1名	2名	3名	2名
5.1	5.0	4.9	4.8	4.7	4.6	4.5	4.4	4.3	4.2
3名	7名	2名	4名	3名	5名	7名	7名	2名	4名
4.1	4.0	3.9	3.8	3.7	3.6	3.5	3.4	3.3	
8名	3名	6名	1名	1名	1名	5名	1名	1名	

＜決勝における E スコア分布＞

8.60	8.50	8.45	8.35	8.30	8.25	8.20	8.15	8.10	8.05
1名	1名	2名	3名	4名	5名	6名	5名	4名	8名
8.00	7.95	7.90	7.85	7.80	7.75	7.70	7.60	7.50	7.45
6名	3名	7名	3名	3名	4名	3名	3名	1名	4名
7.40	7.35	7.30	7.25	7.15	7.05	7.00	6.85	6.60	
1名									

＜着地加点＞

	決勝
E 難度	2 件
D 難度	10 件
C 難度	11 件
B 難度	1 件
A 難度	0 件

＜内規加点＞

	決勝
0.5	1 件
0.4	3 件
0.3	3 件
0.2	20 件
0.1	24 件

＜減点箇所とその傾向＞

- ・ 静止が要求されるすべての技において、静止がみられなかったものは不認定とした。
- ・ 「後ろ振り上がり十字懸垂 (ⅢC)」や、「け上がり十字懸垂 (ⅢC)」において、持ち込む際に肘が大きくまがった実施は、その度合いにより不認定もしくは「十字懸垂 (ⅡB)」のみの認定とした。
- ・ 「け上がり脚前挙支持 (ⅢB)」において、け上がり支持の際に脚が大きく下がった後に再び脚前挙に持ち込んだものは、2 技に分割して難度を認定した。
- ・ 「開脚水平支持」において、腰が大きくまがった実施は不認定とした。
- ・ 「後方車輪倒立：2 秒 (ⅠC)」や、「前方車輪倒立：2 秒 (ⅠC)」において、肘をまげて持ち込んだものであっても、振動技として認められる範囲内で難度を認定した（高校適用規則）が、倒立姿勢が維持できずに大きく肘や腰をまげたものは不認定とした。

<決勝における加点対象となった技とその数>

難度	EG	技名	実施数
E	Ⅲ	後ろ振り上がり中水平支持:2秒	5件
D	Ⅱ	中水平支持:2秒	17件
	Ⅱ	伸腕伸身逆上がり十字懸垂:2秒 (アザリアン)	8件
	Ⅱ	背面水平懸垂経過十字懸垂:2秒 (ナカヤマ)	4件
	Ⅲ	輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂:2秒 (ホンマ十字懸垂)	36件
	Ⅲ	ほん転逆上がり十字倒立:2秒	2件
	Ⅲ	後ろ振り上がり水平支持:2秒	2件

<今後に向けて>

決勝においてD難度以上の力静止技を実施して内規加点を得た選手の数には昨年大会と比べ9名増加し(参加85名中、昨年42名、今年51名)、多くの選手が積極的に高難度の力静止技を実施してきた。最大の加点は0.5であり、大学生、社会人選手にも見劣りしない演技を実施した選手もいた。実施された加点対象の技で特に多かったのは、昨年と同様「輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂(D難度)」と「中水平支持(D難度)」であった。決勝におけるDスコアの平均値はさほど変化は無かった(昨年4.57、今年4.54)が、技の質や完成度を比べれば今年の実施の方がはるかに優れていたと感じた。しかしながら、十字懸垂系の加点技の実施が50件に対し、水平支持系の加点技が24件であったことはやや物足りなさを感じた。つり輪は種目の特性上、技の習得に長い月日を要するが、高校1年生の若い時期から将来を見据え、正しい姿勢と技術を習得していかなければならないと考える。今後もつり輪の本質である「力強い安定した演技実施」を求め、更なるトレーニングを継続し、より熟練された演技を身につけていきたいと切に願っている。

《跳馬》

D1: 吉田義経

<決勝における D スコア分布>※○数字は、種目別 2 本目

D	I	II	III
5.6		ロペス 1名	
5.2		ドリッグス 12名	シューフェルト 2名
4.8	ロウ・ユン 2③名	アカピアン 37名	伸身マルチェンコ 2 回ひねり 3名
4.4		伸身カサマツひねり 8名	伸身マルチェンコ 3/2 ひねり 2名
4.0	伸身クエルボ ②名	伸身カサマツ 13①名	伸身マルチェンコ 1 回ひねり 1①名
3.2	前転とび前方屈身宙返りひねり ②名	伸身ツカハラ 1名	
2.8	前転とび前方屈身宙返り ①名		
2.2		ツカハラ 1名	
0.0		2名	

<決勝における E スコア分布>※○数字は、種目別 2 本目

9.50	9.45	9.40	9.35	9.30	9.25	9.20	9.15	9.10	9.05
				3名		2名	1名	3①名	1名
9.00	8.95	8.90	8.85	8.80	8.75	8.70	8.65	8.60	8.55
4①名	6名	5名	4名	3①名	1名	7①名	5名	3名	4名
8.50	8.45	8.40	8.35	8.30	8.25	8.20	8.15	8.10	8.05
4①名	7②名	3①名	1名	3名	4①名	1名			
8.00	7.95	7.90	7.85	7.80	7.75	7.70	7.65	7.60	7.55
1名					①名	2名		1名	1名
7.50	7.45	7.40	7.35	7.30	7.25	7.20	7.15	7.10	0.00
1名		1名						1名	2名

<E スコア分布 (予選・決勝 1 本目・決勝 2 本目) >

9.50~9.05	9.00~8.55	8.50~8.05	8.00~7.55	7.50 以下
12・10・1 名	107・42・3 名	95・23・5 名	25・5・1 名	23・3・0 名

<着地加点>

	予選 262 跳越	決勝 1 本目 83 跳越	決勝 2 本目 10 跳越
	16 件	7 件	1 件
割合 %	約 6.1%	約 8.4%	10 %

<減点箇所とその傾向>

1. ND (ニュートラルディダクション)

ライン減点 ※予選・決勝、全演技を通してNDはライン減点のみであった

	予選 262 跳越	決勝 1 本目 83 跳越	決勝 2 本目 10 跳越
0.1	35 件	10 件	0 件
0.3	24 件	4 件	0 件
割合 %	約 22.5%	約 16.8%	0%

2. 転倒 (着地において 1.0 減点)

	予選 262 跳越	決勝 1 本目 83 跳越	決勝 2 本目 10 跳越
	25 件	7 件	1 件
割合 %	約 9.5%	約 8.4%	10%

<今後に向けて> ※ ○評価された観点 ×減点の対象となる観点

1. 第一局面において

○膝・つま先が閉じられしっかりと伸びている

×足割れや脚開き、膝まがりや腰まがり

×グループ I・IIIにおいて、肩角度のついたままでの突き放し、グループ II において、手首から肩までが垂直面ではない、または肩角度がついたまま倒立位を垂直に経過していない

2. 第二局面において

○高さ・飛距離を共に有した雄大な実施。ブレることなく垂直面の運動軌道を経過した回転効率の良いひねり、空中姿勢においてコントロールされている

×空中における足割れ・足のからみ・つま先のまがり、伸身(屈身)姿勢の超越における膝まがり、伸身姿勢の跳越における腰まがり、ひねりにおける軸ぶれや縦回転の回転効率

3. 着地の準備において

○着地面を意識した準備が見られる

×不十分な回転、不十分なひねりのまま、回転しすぎて身体をコントロールできていない

4. 着地において

○頭の位置が高く着地姿勢のしっかりとれているもの、動いてしまったが準備がしっかりとれているもの

×頭の位置が低い、腰がひけている、正しいひねりの完了位置を向いていない(足先・身体)

5. 跳越技において

・Dスコア 5.6 の実施は、予選・決勝において各 1 名であった(ロペス)。

・Dスコア 5.2 の実施は、予選 19 名・決勝(1 本目のみ) 14 名であった。

・縦に 3 回転する跳越は見られなかった。

・決勝(1 本目)において 4.8 以上の跳越をした選手は、約 69%であった。

6. 種目別決勝 ※次年度からは 1 本跳越

・2 本跳越した 10 名の D スコア平均は、1 本目 4.92、2 本目 3.96 であった。

7. 感想

○上記 1. 第一局面において、膝・つま先を閉じ、伸ばしている選手(学校)が数名(数校)見られたことは、普段の練習からの意識の高さを感じた。

《平行棒》

D1： 高橋義憲

＜決勝における D スコア分布＞

6.3	6.1	5.9	5.8	5.7	5.6	5.5	5.4	5.3	5.2
1名	1名	1名	1名	3名	3名	1名	2名	1名	2名
5.1	5.0	4.9	4.8	4.7	4.6	4.5	4.4	4.3	4.2
0名	7名	2名	6名	9名	9名	7名	2名	3名	4名
4.1	4.0	3.9	3.8	3.7	3.6	3.5	3.4	3.3	3.2
3名	4名	2名	1名	2名	1名	2名	0名	0名	1名
3.1	3.0	0.0							
0名	2名	1名							

＜決勝における E スコア分布＞

9.35	9.15	8.75	8.70	8.65	8.60	8.55	8.50	8.45	8.40
1名	1名	1名	1名	1名	3名	3名	2名	2名	2名
8.35	8.30	8.25	8.20	8.15	8.10	8.05	8.00	7.95	7.90
5名	2名	3名	3名	8名	3名	2名	2名	5名	5名
7.85	7.80	7.75	7.70	7.65	7.60	7.55	7.50	7.45	7.40
1名	6名	4名	2名	2名	1名	2名	1名	1名	3名
7.0	6.85	6.80	6.65	4.75	0.0				
1名	1名	1名	1名	1名	1名				

＜減点箇所とその傾向＞

平行棒における減点箇所で見つかったのは倒立や脚前挙の静止時間の短さであった。何気ない2秒の静止であるが減点が伴う実施が多く、この減点については決勝最終班にも同様に見られた。静止時間の減点に0.1という減点はなく、0.3もしくは0.5（不認定）である。倒立静止（1A）を含む7技で構成している選手では倒立静止が不認定となり6技となってしまう演技もあった。傾向としては演技終盤での減点が多くあった。0.3とは難度価値点にするとC難度と同等となる。1つのC難度を自分のものに、演技として試合で使うまでにどれだけの練習量が必要か再確認してもらいたい。

棒下宙返り系（倒立・懸垂・支持を含む）での肘、膝の緩み、宙返り腕支持系の技での受け方などで減点がされてしまうケースが多く見受けられた。棒下宙返り技に関しては予選から棒下宙返り懸垂（A）、支持（B）、倒立（D）、ひねり倒立（E）と多く実施された。懸垂や支持に関しては技の最終姿勢が曖昧なまま次の動きに流れる実施が多く見られた。棒下宙返り倒立やひねり倒立では最終姿勢に意識がいきなり運動過程が雑になっている実施も多々見られた。

宙返りから腕支持になる技で多く実施されたのは『懸垂前振り後方かかえこみ宙返りひねり腕支持』で、その多くは切り返しが甘く両腕を大きく広げて腕支持になるという準備局面がはっきり見られない実施であった。その他にも同じ終末局面の技として『ハラダ』や『前方宙返り開脚抜き腕支持』などであったが、バーへの接触などもあり減点の多い実施が多数見られた。

そして今大会特に気になったのは前振りひねり倒立（ツイスト）の捌きである。傾向としては演技の中盤から終盤にかけて取り入れる構成が多かった。主な実施減点として、突きがなく高さを表現することができない、受けた際に肘がまがってしまう、軸ブレして横に出てしまう、倒立におさめることができないなど、中には多くの減点

項目を受けてしまう実施が散見された。

<今後に向けて>

上位校に関しては選手の能力に応じて D スコアを上げてきており、その D スコアに合わせ高い E スコアを得ようと演技する気持ちが伝わってきた。

所属先でそれぞれ練習環境には違いはあり、全ての選手が同じ技を同じ時期に習得できる訳ではない。とかく選手は『あの技を行いたい』『この技を絶対次の大会で使いたい』と演技ではなく技に執着するときがある。しかし、選手個人の持っている能力の範囲で D スコアを作り上げ、美しい体操（演技）を安全に確実に実施することが競技会に臨む以上、忘れてはならない核の部分であろう。今一度自分の演技を振り返ってもらいたい。

今回演技以外で注意してもらいたいことが幾つかあった。一つは炭酸マグネシウムの使い方。バーに塗る行為が少し雑になってきたと感じる。また踏み切り板の使い方、マットの上に置くというよりも、叩きつけるようなチームもあったので、器具を慈しむ姿勢を忘れずにしてもらいたいものである。さらに演技終了の挨拶をしている選手の前を横切る次の選手も多く見られ、選手全員が最後まで気持ち良く演技できるために、周囲に意識を向けさせるよう監督・コーチから指導されますようお願いいたします。

《鉄棒》

D1：三富 洋昭

<決勝における D スコア分布>

6.3	5.8	5.7	5.5	5.4	5.3	5.2	5.1	5.0	4.9
1名	2名	1名	1名	2名	3名	1名	5名	3名	5名
4.8	4.7	4.6	4.5	4.4	4.3	4.2	4.1	3.9	3.8
8名	9名	6名	6名	8名	6名	6名	3名	5名	1名
3.7	3.3								
1名	1名								

<決勝における E スコア分布>

8.85	8.70	8.65	8.60	8.55	8.50	8.45	8.40	8.35	8.30
1名	2名	1名	1名	3名	3名	6名	10名	3名	8名
8.25	8.20	8.15	8.10	8.05	8.00	7.95	7.90	7.85	7.80
7名	9名	6名	4名	4名	3名	1名	1名	1名	1名
7.75	7.60	7.45	7.40	7.15	6.95	6.90	6.70		
1名	1名	1名	1名	2名	1名	1名	1名		

<着地加点>

	予選	決勝
E 難度	8件	6件
D 難度	42件	22件
C 難度	9件	1件
B 難度	6件	0件
A 難度	6件	0件

<減点箇所とその傾向>

- ・ひねって倒立になる技や大逆手（片大逆手）になる技における倒立位の角度減点。倒立位から大幅に逸脱する実施を複数行うと減点がかさむ傾向にある。
- ・車輪における膝のまがり、ゆるみ。とくに手放し技や終末技の前で加速する車輪に多く見られた。
- ・後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下りの空中局面での腰まがり。
- ・手放し技でバーを持つ際のつまりや肘のまがり。

<今後に向けて>

予選、決勝をとおして丁寧な着地が多く見られた。例年にくらべ着地をとめた選手が多いと感じた。着地をとめることへの意識が高まっていることは大変良い傾向であるが、さらに望むべくはより高い姿勢で準備ができ、余裕をもってとめることが可能な実施を期待したい。前述にも挙げたが、ひねって倒立になる技や大逆手（片大逆手）になる技で倒立位からの角度逸脱する実施を複数行うと減点がかさんでしまう。後方車輪ひねり倒立や前方車輪ひねり倒立など、A 難度の技であっても丁寧に倒立位に収める捌きを意識して欲しい。技一つ一つのきめをしっかりと行い、より減点の少ない演技を心がけてほしい。雄大性や美しさが表現された演技が評価につながるので、さらなる鍛錬に励んでいただきたい。